

て、自家に歸りて、周ねく四邊を搜めしに、炭廠の邊りに至りて、流血の淋漓たるものあるに遇ひ戸を排して、内に入れば、醒風先つ面を撃て、眼前に横はるものは何！。三寸息絶て花容又昔日の人にあらず。幽魂何處の邊に彷徨ふらん、死尸空しく血に塗れ、而も端然其の容を亂すなく、從容として死に赴ける様を見る。其の驚き知るべきなり、

折ふし、嘉右衛門出て、他に在りしかば、使を急がして、呼び歸しへに、變を聞かや、倉惶馳せ至り、先づ其の四邊を見るに、別に小机を傍らに置き、遺書二通を安せるあり。

(未完)

## 黒澤登幾子 (第九號につづく)

下村三四吉

登幾子が里方にかへりし後、これに再嫁を勸むるものありしかど、固く執りて聽かず。亡夫彦藏のわすれがたみたる幼女の年長ずるに及び、これが婿を迎へて家を繼がしめ、靜に餘生を送りぬ。女紅の餘暇に詠出せる國風は積んで巻を成し、風流韻事に復他念なきが如くなりしも、深く國事に心を潜め、憂世慨時の情は、また自ら詠歌の裡に發露せりき。

天保以後に於ける幕府の衰運は、次第に事實の上に見はれ、西洋諸國の壓迫は、ますますその急を告げ來り、終に嘉永六年ペルリ提督に率ゐられたるアメリカ合衆國の船艦は、浦賀に來りて、我

が鎖國の門戸を叩き、長夜の懶夢を醒覺せり。これより、開港攘夷の論天下にかまびすしく、國內非常の紛雜を極めたりき。この間に於ける諸事情は、先に本誌上に掲げたる津崎矩子の傳中に詳述したれば、之を省略すべし。

井伊直弼が大老の職に就き、專斷を以て五國と通商條約を締結し、また衆望に反して幼冲なる家茂將軍を擁立せしより、所謂密勅事件となり、遂に、安政の獄と稱する大狂瀾は起されき。この時水戸老公齊昭は、該事件の中心とも認められし人なれば、尾張侯并に越前侯と共に蟄居を命ぜられき。その他志士の斬流禁錮せられしもの百餘人に及び、物情愈々洶々たり。

登幾女が憂國慷慨の名はかねて、世に聞こゆる所ありしかば、安政の獄起りて海内の名士逮捕せ

らるるもの相つきし時に當り、或は禍の登幾女に及ばんことを慮りて、宜しく韜晦して危難を避くべきことを勧めしものありしが、登幾女は慨然としてこれに答へて、わが身は既に國家の爲めにさげたり、豈微命を惜まんやといひ、意氣凜然たり。すゝめたるものもなかゝに耻ぢて、復かへすべき言もなくして止みきこぞ。

齊昭は天下有志の一中心と仰ぎし所なるに、このたび嚴譴にあひて幽錮の身となりしかば、憂國の念もゆるが如き登幾女は、深く藩主の冤枉をなげき、單身にて京都に赴き帝關に伏してその冤を訴へんと決心せり。よりにて、その志を母に告げていへるやう、わが君公の正義は天下のあまねく知れる所なるにも係はらず、今は幽閉の禍を被ふりたまへり、閩藩の志士は憂憤して日を亘れども、

なほ洗雪する所もあらずして、まことになげかは  
 しきさはみなり、われは不敏の身なれども、潛に  
 京都に上りて、縉紳の門に出入して志の在る所を  
 告げ、君公の冤を雪がんとおもふ、事もし成らず  
 ば、一死を以て國家に報いん覺悟なり、願くはこ  
 の事を許されたまへと。母もその決心の頗る堅き  
 を見、その忠節に感じてたやすく、承諾せしのみ  
 ならず却て之をすゝめはげましたり。(つづく)

おもひきり

山田の案山子竹の弓

なすこさもなく

くちばてんきは

中山忠光

紅葉狩

文苑



時雨ふるあしたを待ちて思ふどち

水野忠敬

野山の奥のみみぢがりせん

相澤 朮

揚ばりの中のまとのゑはあてびとの

今日この山に紅葉みるらん

赤堀信成

きさはよしのみかくるとも二荒山

夕日の照す紅葉みてゆかん

矢田猪平

渡舟もみぢかざしてうちのれは

にしきたいよふ水のみも哉

山崎房吉